

おばあさんの話

南 出喜久治

平成22年8月15日記す

今回は、小泉 八雲(ラフカディオ・ハーン)の『おばあさんの話』(Obahsan-no-Hanashi)という作品(「明治日本の面影」講談社学術文庫)について述べてみます。

その書き出しには、「こうあります。

「今ではもう、いかなる民族も私がこれから語るような人物を生み出すことはできないだろう。その女は、私も西洋世界の人間に想像もできないほど厳格な躰——女性のためだけの、ある理想を実現させるための特別な躰——によって育まれた。

その理想とは、他人のためだけに働き、他人のためだけを思い、他人のためだけに生きる女、限らない愛情と限りなく無私の心を持ち、犠牲を厭わず、返礼を求めない、そんな女だ。しかし何世代にわたり幼い頃からあらゆる面で厳しく教え込むことにより、ついにそのあり得べからざる理想が現実のものとなった。蟻か蜜蜂のようにエゴイズムを知らず、我がままとはいっさい無縁で、人を悪く思うことのおよそできない女、生まれ育った社会を離れては生きてゆけないほど善良な女。むろん、これほどできた女は、古来稀で、女性一般の風(ふう)となることは決してなかったが、少なくとも昔の日本では、それがお手本にできるくらい身近な存在であった。そして女性というものが教育によりどれほど変わり得るか

を見事に証していた。こうした女性は声高（こわだか）に讚（ほ）められることもなく、静かに愛され、見習われた。女性の鑑（かがみ）（かみ）とはいつても、人さまさまである。私（わたし）はその中で最も素朴（そぼく）な人、私の一番良く知る人のことを語りたい。」

皆さんには少し難しい内容ですが、日本に帰化した小泉八雲というギリシヤ生まれのイギリス人が、このひと（おばあさん）が住んでる近くにいたことに、驚きと尊敬の気持ちを抑えることができなかった感動がよく伝わってきます。そして、この話は、書き出した文章に続いて、このおばあさんの性格や生活の様子が事細かく詳しく描かれています。長い文章なので、多くの部分を箇条書きにしてみます。

やせた小柄な女性。六十八歳。髪は烏の濡れ羽色。歯はいたつて丈夫。子供のようには明るく澄んだ鋭い目。字を読むにも針を持つにも、メガネがいらぬ。足腰も達者。一里や二里なら平気で歩く。神社やお寺の祭礼にでかけて孫たちのおみやげを買ってくる。肉や珍味のたぐいはいっさい口にしない。米、果実、野菜以外のものはめつたに食べない。魚も口にしない。生き物を殺して食べるのは殺生戒を犯すと固く信じている。病気もめつたにかからぬ。暑さ寒さや、部屋の中のすきま風を気にも留めない。一日中、絶えず人の世話をする。冬でも夏でも朝一番に日の出とともに目を覚ます。そして、奉公人を起こし、子供たちに着物を着せ、朝食の仕度を指図し、ご先祖様へのお供え物を按配する。手のかかる子供が五人。家の中では、夜ふとんに入るまで片時も手を休めない。暇さえあれば針仕事。孫、息子、嫁、使用人のものまで自分で縫う。特に仕立ての難しいもの以外の裁縫の仕事は決して余所に出さない。家庭で使いたい品の品は自分で作るか女中に指図して縫わせたもの。腰を下ろして話し込んだりしない。そのようなことをして仕事を怠けてはお天道様に申し訳ないと思っている。とても口

数が少ない。孫相手だと子供言葉でお喋りをしてお伽話もたくさんする。普段は口よりも顔や微笑みで話をする。朗らかで可笑しな笑顔は誰からも好かれている。武家の作法として、侍の家では婦女子が無用のお喋りをことさらに忌むことを心得ている。大人が相手だと必要なこと以外はいつさい口にせず、時折、皆を喜ばせるようなことを二言三言いうが、求められて助言するだけ。昼間から外出するのは、子供のお守りで、たいていは近くのお寺か神社に行く時か、祭礼などでお詣りに行く時に限られる。晩方の外出を好み、家の品や孫のために珍しいおもちゃなどを買い込んでくる。実に多くの物事を、その目で見、その耳で聞き、その頭で考えてきた。胸にしまっていた想像できないほどの深い知恵を、おばあさんは求められればいつでも愛する者たちに分かち与える。決断のつかない時、苦難に見舞われた時、一家の者はまるで神のお告げを求めるかのように助言を求めるが、おばあさんはすぐには答ええない。いつものように座り、針を動かして、考える。そしてだいたった頃、「これこれこうするのがよからう」と言う。家の者は必ず言われた通りにする。その結果も必ずおばあさんの言った通りになる。それで皆んなは、あばあさんがこう当てなされるのも、神仏に近いお身の上だからなのだと思える。小さい頃からおばあさんをよく知る老人たちは、おばあさんが人を悪く言うのを聞いたことがない。

「でもおばあさんはとても辛いめにあってきた。たくさんのお武士の家が金貸しにだまされて潰れていった時代には、おばあさんもずいぶんひどい仕打ちを受けた。その上、多くの愛する者たちと死に別れた。しかしその苦しみも悲しみも、おばあさんは決して人に漏らさない。怒りを露わにしたことは一度もない。世の悪行についておばあさんはお釈迦様と同じように考える。それは迷いであり無知であり愚かなのだから、怒るよりも憐れんでやらなくてはいけな

いと。おばあさんの心には憎しみの付け入る隙もない。」

どうです。すごいおばあさんでしょう。まるで、「生きた教育勅語」といえるでしょう。この作品が書かれた時代からして、教育勅語の以前から生まれ育って生きてきたおばあさんなのです。そして、このようなあばあさんがそれこそ全国にいて、それほど珍しなくなかったのですから、昔の日本の「民度」が今と違って想像できないほど高かったということです。「民度」という言葉は、国民の生活や文化の水準の程度を意味しますが、特に、この場合、民度が高いという意味は、このような気高く誇りのある美しい生き方ができるために必要な躡と教育の水準が驚くほど高いことを意味します。国民に備わって品格が優れていることです。

「このおばあさんは、今の多くの宗教家や教育者などのように、しかめっ面をして拳を振り上げ肩に力を入れ、道徳や倫理などを言葉巧みに他人に説きながら生きてきた人ではありません。贅沢な生活をして自分では何もせず、評論家のようにもってもらしいことを口数多く語る人でもありません。ほんとうに楽しい気持ちで毎日毎日喜んで実践し、黙って生きてきた人なのです。世界のどんな聖人や聖職者であってもできないことをしているのです。無理をして自分を犠牲にしているという気持ちが全くなく、とにかく明るく、誇り高く、強く、正しく、そしてなによりも、こころねが美しい。だからすごいのです。」

小泉八雲は、この話の最後に、「この人を作り上げた社会の条件はとうの昔に消え去っている。そして次に来る新しい世の中では、どのみち、このような人は生きていけないだろうから。」と述べて終わっています。しかし、嘆いたりするときではありません。諦めてはいけません。こんな人が一人でも多くいる社会がより良い社会のはずです。ですから、みんなの知恵と工夫で少しずつ昔の民度にまで引き上げられることをしましょう。そして、このおばあさんを少しでも見習って美しい心で生活するためには、やっぱり、お父さん、お母さん、おじいさん、あばあさん、ご先祖様を大切にして感謝する気持ちを持って祭祀の道に励むことから始まるのです。

